を施行中である．

21）食道癌肉腫の1例

桑原　史郎・鈴木　俊繁
武者　信行・植木　匡
岡　至明・鈴木　茂
武藤　一朗・西巻　正
藍沢喜久雄・鈴木　力
畠山　勝義　（新潟大学第一外科）

癌肉腫は同一腫瘍中に癌腫と肉腫成分が混在する悪性腫瘍で，食道に発生するものは希である．今回我々はきわめて急速な発育をきたした食道癌肉腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する．症例は64歳男性．1993年8月より嚥下困難が出現し，10月6日近医に入院，精査にて食道癌と診断され，11月2日手術目的に当科入院となった．画像診断では胸部中部食道から胃におよぶ粘膜下腫瘍様の巨大隆起性病変を認め，生検で spindle cell carcinoma と診断された．11月25日非開胸食道抜去術を施行した．病理組織学診断は，『いわゆる癌肉腫』(so-called carcinosarcoma) であった．術後経過は順調であり，50.4 Gy の術後照射を行い退院した．

22）胃癌術後の腹膜播種に化学療法が奏功した1例

川上　一岳・川合　千尋
大谷　哲也・藤田みちよ
吉田　奎介　（日本歯科大学新潟歯学部外科）

症例は41歳の女性．1991年7月，他院で胃癌のため胃全摘術を受けた．術後，CDDP+5-FU を2クール施行し，その後は外来で follow up していた．同年11月頃から CEA が上昇し始め，93年1月には Schnitzler 転移が明らかになった．腹水も生じてイレウスとなったため，同年7月当科に紹介された．イレウス管を挿入したが症状は改善しなかったため化学療法を施行した．まず腹水 2,000 ml を排除した後，CDDP 100 mg を腹腔内に注入した．同時に 5-FU 500 mg を5日間静注した．その結果，腹水が著しく減少したため，さらに CDDP 100 mg，5-FU 500 mgx 5日をともに静注で2クール施行した．9月末，イレウス管を抜去し，経口摂取を開始した．11月に1クール追加した後に退院した．以後，外来に通院していたが，94年4月に強度の下痢を生じたため，さらに1クール施行したところ，症状は改善した．イレウス発症から約1年経過した現在，経口摂取は良好で，体重減少もなく，元気に自宅で生活している．

23）大腸癌肝転移症例の治療経験

加藤　英雄・新国　恵也
野村　達也・吉川　時弘
佐々木公一　（厚生連中央綜合病院外科）

大腸癌肝転移症例に対する肝切除および肝動注の意義について検討した．【対象および方法】1989年1月より1993年11月までの間に，当科で手術された大腸癌429例のうち肝転移を認めた56例（同時性33例，異時性23例）を対象とした．肝転移に対する治療法を以下の4群に分けて比較検討した．Ⅰ群：肝切除のみを施行した7例，Ⅱ群：肝切除に加え予防的肝動注を施行した12例，Ⅲ群：肝切除を行わず肝動注のみを施行した12例，Ⅳ群：肝転移巣に対して局所的治療を行わなかった25例である．【結果】① 肝切除後に予防的肝動注を施行した群の生存率は有意に良好であった．② 肝切除19例中11例（53%）が生存中で，うち7例は無再発である．12例に再発（腹膜再発4，リンパ節再発7，肺転移2）がみられ，残肝再発が確認された症例は5例（41.7%）であった．③ Ⅲ群12症例中 CR 1例，PR 4例を認め，奏効率は41.7%であった．また，Ⅲ群とⅣ群の比較ではⅢ群で有意な生存期間の延長がみられた．

24）フローサトメトリーによる頭頸部腫瘍のリンパ節転移と化学療法の効果の関係について

J.W. Mahmood
鈴木　克也・野村　務
新垣　晋・中島　民雄　（新潟大学歯学部口腔外科）

25）温熱療法が著効した手術不能進展口峡咽頭癌の1例
—放射線動注化学療法併用—

長島　克弘・鶴巻　浩
星名　秀行・小柳　広和
大橋　靖　（新潟大学歯学部口腔外科）

従来より巨大なリンパ節転移を有する症例は制御困難とされている．今回私達は，広範囲に進展した原発巣を有し，巨大な両側頸部リンパ節転移を認めた症例に対し，根治療法として放射線動注化学療法同時併用温熱療法を施行し，腫瘍の消失をみた1例を経験したので報告する．症例：61歳，男性．初診：平成6年1月21日．現症：左